

# 2014 年度 KEIEITAN ボランティア隊活動報告

## KEIEITAN 2014 Volunteer Activities by Students in Tsunami-Devastated Area

武田 直之                      塚本 佳子                      早川 健太郎  
Naoyuki Takeda      Yoshiko Tsukamoto      Kentaro Hayakawa

### 〈摘要〉

本学では、東日本大震災直後の平成 23 年よりボランティア隊を結成し、被災地での支援活動を継続して行ってきた。遠隔地からのボランティアについては、移動や宿泊にかかる費用や時間といったコスト面の負担が大きく、合理性に欠けるという指摘もある一方で、被災地への関心や寄付行動を高めるといった側面もある（渡辺，2014<sup>[1]</sup>）。こうした状況下において、問題に直面しながらも、学生たちがボランティア活動の意義に向き合ってきた過程を踏まえながら、今年度の KEIEITAN ボランティア隊の活動を概観する。

〈キーワード〉 学生ボランティア、遠隔地、KEIEITAN ボランティア隊

### I. はじめに

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発生した東日本大震災による爪痕は、今なお大きく、4 年 9 か月が経過した平成 27 年 12 月 10 日現在でも約 18 万 2 千人が避難生活を強いられている（復興庁公表資料<sup>[2]</sup>）。

その中で、名古屋経営短期大学では学生主体の KEIEITAN ボランティア隊が組織され、震災直後の平成 23 年より活動を継続してきた（近藤・渡部，2013<sup>[3]</sup>）。ボランティアに携わってきた学生の尽力のみならず、関係各所の多大なるご支援と甚大なるご協力の賜物であることは言うまでもない。一方で、遠隔地から継続して支援活動を行なうには、限られた資金、時間など様々な制約があり、そうした中でのボランティア活動のあり方が問われている（渡辺，2014）。

名古屋経営短期大学の所在する東海地域でも、大規模震災が発生する可能性が高いと言われ続けているが、学生や地域の危機管理意識は十分に高いとは言えない。そこで、2014 年度 KEIEITAN ボランティア隊の活動目的を、1. 学生の自主的なボランティア活動に

よって、自らの学生生活の在り方について探求し、学生相互、関係機関、ひいては地域、社会との連携を通じて、相互発展のために広く寄与すること、2. これまでの活動を継承し、遠隔地から持続可能な復興支援を行うこと、の2点とし、その目的達成のため、各種事業への協力活動や、必要な知識を修得するための研修を企画実行してきた。

## II. 活動内容

### 1. 活動日程

- 6月 参加学生の募集告知および参加者の決定
- 7月 年間計画の立案、実施
- 8月 年間計画の実施、事前学習
- 9月 東日本大震災被災地の視察研修および現地からの報告
- 10月 文化祭での展示ブース準備
- 11月 視察報告会の発表準備
- 12月 視察報告会
- 1月 日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会 学生プレゼンテーションコンテスト
- 2月 次年度活動計画の立案

### 2. 参加者

寺島裕幸（総合ビジネス学科2年）、三宅誠（子ども学科1年）、川端進太郎（子ども学科1年）、鶴飼彩夏（子ども学科2年）、加藤あさひ（子ども学科2年）、学生計5名+引率教員2名



写真1 事前学習の様子

### 3. 事前学習

- 東日本大震災に関するDVD、その他映像の視聴
- 過年度活動報告書の読み合わせ
- 震災者手記の読み合わせ
- 菊武夏まつりでのフリーマーケットの運営

## III. 活動詳細

### 1. 震災復興ボランティア視察研修

日程：平成26年9月4日(木)～7日(日)の3泊4日

場所：宮城県仙台市、および名取市

視察研修先：NPO 法人ひより、NPO 法人地球のステージ、ほか

### 1) せんだいメディアテーク

現地到着後まずは、せんだいメディアテークを訪れ、「2011.3.11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《いいつたえ、むかしばなし、はなし》」展を見学した。仙台市内は沿岸部地域における津波被害、宅地被害こそ甚大であったものの、繁華街では津波による影響は少なく、視察時においては落ち着きを取り戻しているように見えた。しかし、いたるところに「頑張ろう東北」「復興」といった文字が散見され、人々の記憶の中に東日本大震災が深く刻まれている様子が伺えた。



写真2 メディアテーク内にて

見学したせんだいメディアテークは、美術や映像文化の活動拠点であると同時に、すべての人々がさまざまなメディアを通じて自由に情報のやりとりを行い、使いこなせるようにサポートする公共施設として2001年に開館され、震災に関するワークショップや、ギャラリーなどのプロジェクトについても、複数進行されている<sup>[4]</sup>。訪問時には、「2011.3.11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《いいつたえ、むかしばなし、はなし》」展が開催されていた。この展示のもととなる「宮城県民話伝承調査」は1985年から1988年の3か年で行われており、語った人の大部分は震災の前に亡くなっているうえ、語られた土地の姿は津波によって変わり果ててしまっていた。しかし、それらの貴重な資料からは、その土地で生きていた人々の姿をありありと感ずることができた。

また、展示が行われていた7階の被災状況が写真パネルとして掲示されており、今自分たちがいるこの場所の天井がすべて落下し、逃げる場もなかったという現実を目の当たりにした。

### 2) 仮設住宅訪問

その後NPO 法人ひよりの大沢氏、小室氏による案内で、名取市みなし仮設住宅を訪問し、そこで暮らす人々から話を伺った。事前学習の中でいくつか質問事項を用意していたが、実際には「どこまでお聞きしてよいか」という戸惑いから、なかなか直接質問することができずにいた。しかし、集会所に集まった人々はそうし



写真3 仮設住宅集会所

た学生たちを温かく迎え入れてくださった。

その仮設住宅で暮らす人の多くは、名取市内でも被害の大きかった閑上地区で生活されていた。自治会長である橋浦氏が最初に語ってくださったことは、閑上地区に住んでいた先人たちが大変な思いで街づくりされてきたということであった。穏やかに、力強く、笑顔で語ってくださるその姿に、生まれ育った土地に対する思いをうかがい知ることができた。

みなさんと手遊びや、歌を交えながら、一緒に声を出して笑い対話することができ、少しずつ学生たちの戸惑いが和らいでいった。学生が、様々な体験談を聞く中で、共通していたことは、家族への思い、生まれ育った地への思い、ということであった。

参加した学生は後に、「つらい記憶を思い出させてしまうことに戸惑いがあり、なかなか言葉を発せずにいたが、震災当日の様子を涙ながらに語っていただいた後、『聞いてくれてありがとう』と言ってくださったことで安心できた。私たちが何をしなければならぬかが、少し見えた気がする」と振り返った。

### 3) 震災学習ワークショップ「失われた時を求めて」

翌9月6日、「閑上の記憶」を訪問した。「閑上の記憶」とは、犠牲となった14人の生



写真4 子どもたちが作成したジオラマ



写真5 ワークショップと振り返りの様子

徒が眠る閑上中学校の慰霊碑を守る社務所として、閑上の方たちが立ち寄れる場所として、そして震災を伝える場所として、NPO 法人地球のステージが地元の方と協力しながら建てたプレハブ施設である<sup>5)</sup>。法人の発起人である桑山紀彦氏は岐阜県高山市出身の心療内科医で、名取市に開業をした直後に被災し、ライフラインが断絶された震災翌日から24時間の診療体制を敷いて医療にあたった。その後も専門である心のケアを展開されている。「閑上の記憶」にはこうした心のケアの一環として、子どもたちによって制作された、被災前の閑上、震災当日の記憶、子どもたちが描く未来の閑上のジオラマなどが展示されていた。

その後、案内人である鈴木氏のもと、閑上地区を視察し、NPO 法人地球のステージ「失われた時を求めて」と題したワークショップを開催していただいた。このワークショップは「震災前の地図」とヒントを頼りに、そこで暮らしていた人の「自宅」を訪れ、家族の歴史や、震災当日をどのように過ごし、今現在どうしているのかに触れることができるというものである。更地となってしまった土地を歩き、見聞きしていくなかで生じた情操を、言葉に紡ぎだしながら行った振り返りでは、学生全員が被災者や自身の家族、友人への感謝の想いを口にしていた。

#### 4) てつがくカフェ

午後からは、前日訪れたせんだいメディアテークに移動し、てつがくカフェ「震災とケア」に参加した。震災直後という非常事態において、職務と家族、そのいずれかを選択しなければならなかったというケースに対して、参加した市民全員でディスカッションするという内容であった。医師や看護師、消防士といった支援者の立場にあった人々も、そのほとんどが被災者であったというジレンマの中で、どのような選択をした



写真6 てつがくカフェの様子

たとしても後悔や苦悩があったという。多くの大人や専門家が語る言葉に耳を傾け、理解できることとそうでないことをそのまま受け入れながらも、そうした人たちを前に挙手をして自分の考えを話す本学学生の姿に、この視察研修の大きな意味が見いだされた。

#### 5) ゆりあげ港朝市見学

活動最終日となった9月7日はゆりあげ港朝市を訪れた。あいにく小雨の降る天気ではあったが、宮城県内外から多くの人が集まっていた。

ゆりあげ港朝市は、30年ほど前から日曜祝日に開催されており、近海で捕れた魚介類や地場産品の野菜などをもとめる観光客が多く集まっていた。震災によって朝市は休止し





写真7 活気ある朝市

ていたが、約1年後、港から場所を移し仮設店舗の「閑上さいかい市場」がオープンされた。その後、津波で流されてしまった元の場所で開催したいという地元の人々の強い思いがけない、2年2か月後の平成25年5月4日に従来の場所での営業が再開された。区画整備の方針も予定も不明確な中ではあったが、カナダ連邦政府による建物の寄贈といった後押しもあり、実現できたということである。

前日の訪問時には、見渡す限りの広大な更地に木造の建物が建つのみで、人や車がほとんど見受けられなかった地に、多くの買い物客が訪れている様子に、参加学生は感慨深い表情であった。学生は地元近海で捕れたおすすめの魚介類を購入し、無料の炭火焼きコーナーで朝食を済ませた後、隣接するカナダ-東北友好記念館「メイプル館」を見学した。飲食スペースのほか、観光客向けに防災のマニュアルや避難時の注意点などの展示もあり、啓蒙の拠点としての役割を担っていた。もともと閑上とカナダとは深い関係があったわけでないそうだが、こうした交流が震災をきっかけに生まれたという点も大変興味深い。

朝市から帰路に就く途中、再度閑上中学校の慰霊碑に立ち寄り、献花とともに手を合わせた。



写真8 防災情報の展示

#### 6) 視察研修のまとめについて

愛知県から、東北地方という遠隔地に対する支援の方策を模索し実行していくことをテーマのひとつに掲げた今年度の活動であったが、そこで学生たちがたどり着いた結論は「伝える」ということであった。被災した人々が、元の生活を自ら取り戻そうと懸命に活動されている中、2泊3日という限られた日程で直接的な支援や活動を立案実行していくことは難しく、費用対効果を鑑みても有効であるとは言えない。そのような中で、被災者の方々が受け止めた後悔を繰り返してほしくない、周囲の家族、友人への感謝の気持ちをもう一度考え直し伝えてほしい、という思いを伝えていくことを今後の活動の軸としていくこととした。

そこで、まずは一日の予定が終了するごとに、その日の活動を簡単な文章としてまとめ、写真を添えたうえで、本学 FaceBook にアップしていった。その記事を学生のアカウント



写真9 夜のミーティング

トでシェアを行った結果、最終的には通常の記事の2~3倍の閲覧者数となった。

なお、現地滞在中は名取市のビジネスホテルに宿泊していたが、連日夕食後全員が集合し、ミーティングが行われた。それぞれが感じた内容を共有し、ボランティアの在り方を考え、この経験を誰に対してどのように伝えていくかを考えることに、大きく時間が割かれ、引率教員が半ば強制的に終了させていたということも付記したい。

## 2. 「伝える」報告活動

### 1) 学長への報告

愛知県に戻った翌日の9月8日午後、長旅の疲労を十分にいやせぬままであったが、学長室を訪問し、各自が記録として残した写真を示しながら視察研修の報告を行なった。中には、被災者から感謝されたことに戸惑い困惑したというエピソードを涙ながらに話す学生も見られた。併せて、今後本学で実施している絆活動の一環として、学生全体へ報告を行う機会を設けていただくことを依頼し、学長から快く承諾していただいた。



写真10 学長への報告

### 2) 大学祭および、菊華高等学校文化祭での活動



写真11 学生が作成した動画の一部

名古屋産業大学、名古屋経営短期大学の合同大学祭、姉妹校である菊華高等学校文化祭にて KEIEITAN ボランティア隊ブースを設け、そこで展示を行うこととなった。

その展示や12月の報告会のために、週1回定期的に集合し、役割を分担しながら準備を進めてきた。各自の写真をクラウドサービスにまとめ整理する者、その写真や動画を活用して動画を作成する者、パンフレットやワークショップ資料をまとめる者、経費を管理する者、ディスプレイや配置を考える者といったように、

学生が主体性をもって準備を進めていた姿が印象的であった。

当日は各自ゼミの役割や授業などのため、展示ブースに常時メンバーがいるというわけにはいかなかったが、高校生や大学生のみならず、保護者や近隣地域の方など多くの方が足を止めてくださったということである。特に動画の効果は大きかった。

### 3) 絆活動「KEIEITAN ボランティア隊報告会」

12月11日(木)絆活動の時間を頂き、一年生全員に対して報告を行った。時間にするとわずか40分ほどの発表であったが、準備にはかなりの時間を要した。

まず、引率教員が簡単に視察研修のスケジュールを説明したのち、各学生がそれぞれ感じたことや、それぞれ伝えていった。総合ビジネス学科2年の寺島裕幸さんは閑上中学校で亡くなった14人の生徒のことや、慰霊碑のことについて、子ども学科2年鵜飼彩夏さんは、閑上の記憶学んだ、創作を通じた子どもたちの心のケア活動について、子ども学科2年の加藤あさひさんは、仮設住宅でお聞きした生まれ育った町への想いと、家族や友人がいる当たり前のことに対する感謝の気持ちを、子ども学科1年の三宅誠さんは話し合い、共有し、つながるということの大切さを、それぞれ自分たちの言葉で発表した。最後に、子ども学科1年川端進太郎さんは全体をまとめ、学生全員に対して今日の報告会のことを家族や友人に伝えてほしいとお願いして、報告を終えた。

その後、作成した動画を流しながら、全員に被災者の方へのメッセージを記入してもらった。



写真12 報告会を聞く1年生

### 4) 日本ビジネス実務学会発表

KEIEITAN ボランティア隊の代表として、まとめを担当した川端さんが1月10日(土)に開催された日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会にて、学生プレゼンテーションコンテストに参加した。

「私のできるボランティア」というタイトルで、ボランティアとは何かを考え、視察研修を通して「伝える」ことにたどり着いたこと、「ボランティアは自分たちのための活動でもよ



写真13 学生プレゼンテーション



い」と思えたという内容を5分という限られた時間で発表を行った。終了後には他大学の先生から、「言いたいことがすごく伝わった」と声をかけられ、充実した様子であった。

#### IV. 今年度の活動を振り返って

今年度も多くの方のご理解と支援のもと、ボランティア隊としての活動を終えることができた。テレビや新聞報道において原子力発電所事故以外の被災地の現状については、取り上げられること自体が少なくなっている。出版業界では「大震災関連書籍はもう出せない状況」という話も現地でお聞きした。こうしたなか、本学でもボランティア隊の活動の在り方が問われ、年々活動資金の基となる寄付が集まりにくい状況となっている。それでも、実際の現場に行き、そこにいる人々と触れ合いながら、生死に向き合った3日間はボランティア隊に参加した学生だけでなく、報告を聞いた学生にとっても有意義であったと考える。

關上地区が訪問直後の平成26年10月よりかさ上げ、区画整備が始まるなど、着実に復興に向かっており、ボランティアの在り方も時々刻々と変化していくであろう。こうした側面に向き合いながらも、活動を継続していくことが求められる。

今年度の目的であった、1.学生の自主的なボランティア活動によって、自らの学生生活の在り方について探求し、学生相互、関係機関、ひいては地域、社会との連携を通じて、相互発展のために広く寄与すること、2.これまでの活動を継承し、遠隔地から持続可能な復興支援を行うことの、2点について一定の成果が得られたと自負している。今後も継続して、学生が「自らの学生生活の在り方を探求」していく姿を見守りたい。

#### V. 費用

収入の部	寄付金	136,879 円
	学友会（学生支援委員会）	150,000 円
	計	286,879 円
支出の部	名古屋-名取交通費（5名分）	146,730 円
	宿泊費（5名分）	63,000 円
	現地交通費	3,750 円
	レンタカー代（ガソリン代含む）	45,802 円
	謝金	15,000 円
	雑費	5,166 円
	ネパール地震支援へ寄付※	7,431 円
	計	286,879 円

※ 繰越予定であった7,431円に学生有志の募金4,527円を加えた11,958円を日本赤十字社のネパール地震支援に寄付（2015/5/27付）

## VI. 謝辞

学生を快く受け入れてくださった、閑上の皆様、NPO 法人ひより、NPO 法人地球のステージの関係者の皆様方に対して深く感謝申し上げます。また、今年度の震災復興ボランティア実施にあたり、多大なご協力とご支援をいただきました名古屋産業大学・名古屋経営短期大学学友会各位、教職員の方々、菊武学園本部の皆様に対しましても、記して謝意を表わす次第です。

### 【引用文献】

- [1] 渡辺裕子（2014）被災地の遠隔地からのボランティアの問題と支援のあり方、社会福祉学、55（3）、106-117.
- [2] 復興庁 全国の避難者等の数 避難者の数 <http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/hinanshasuu.html>
- [3] 近藤城史、渡部琢也（2013）KEIEITAN ボランティア隊震災復興ボランティア活動報告、名古屋経営短期大学紀要、54号、45-58.
- [4] せんだいメディアテーク WEB サイト、<http://www.smt.jp/>、2015年1月29日アクセス.
- [5] 閑上の記憶、<http://tsunami-memorial.org/>、2015年1月29日アクセス.